

シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡について(1) —実験学校設立に至るまでの経過—

小 柳 正 司

(2000年10月15日 受理)

Some Inspections of the Correspondence of John Dewey During His Chicago Years (1)
—On Some Events about His Founding the University of Chicago Laboratory School—

KOYANAGI Masashi

序. デューイ書簡集第1巻刊行について

1999年の秋に『ジョン・デューイ書簡集』第1巻 (*The Correspondence of John Dewey, Vol. 1: 1871-1918*) が CD-ROM 版で公刊された。このデューイ関係の膨大な書簡を編集するプロジェクトは、アメリカの南イリノイ大学にあるデューイ研究センター (The Center for Dewey Studies, Southern Illinois University at Carbondale, Illinois) が全米人文科学基金 (National Endowment of Humanities) の後援をうけて、1990年から取り組んできたものである。

第1巻には、1871年6月に当時11歳であったデューイが生地バーモント州バーリントン (Burlington, Vt.) の教会に提出した教会加入申請文から始まって、35歳のデューイが妻のアリス (Alice Chipman Dewey) とともにサンフランシスコから横浜に向けて出航する直前の1918年12月末までの約3,500通の書簡が収められている。これらには、デューイ本人が書き送ったり受け取ったりした手紙ばかりでなく、妻アリスや両親、子どもたちなど、彼の家族の手紙、さらにはデューイに論及のある第三者の手紙までが含まれている。

第2巻は2001年の春に、第3巻は2003年の秋に公刊される予定らしい。第2巻は1919年1月から1939年12月末まで、第3巻は1940年1月からデューイが死去する1952年までの書簡が収められ、デューイ書簡集全体で16,000通を超える書簡が収められることになっている。

1969年から1990年にかけて逐次刊行された『デューイ著作集』全37巻¹⁾によってデューイ研究は質、量ともに飛躍的な発展を見せてきたが、『デューイ書簡集』の刊行によってデューイ研究はさらなる発展が期待されている。これまでもデューイ関係の書簡を資料に用いた研究は少なくない。ジョージ・ダイキューゼンの『ジョン・デューイの生涯と思想』(1973年)²⁾をはじめとして、ネイル・コーランの『若きジョン・デューイ』(1975年)³⁾や、最近ではロバート・ウェストブルック、

アラン・ライアン、スティーヴン・ロックフェラーなどの諸研究⁴⁾をあげることができよう。これらの研究では、書簡の分析をふまえて、単にデューイの活字になった著作ばかりでなく、それらの背後にある彼の個人的な人となりや家庭生活、人間関係までも含めて、時代を生きた一人の思想家の活動としてデューイの思想を理解する試みがなされている。いまやデューイ研究はそうした段階に至っており、その意味でも包括的で体系的な『デューイ書簡集』の刊行は新たな「デューイ発見」の道を切り開くものとして期待されよう。

先に記したように、『ジョン・デューイ書簡集』第1巻には約3,500通にものぼる書簡が収められており、その量は膨大である。今回、私はその中からデューイのシカゴ大学在職期間にあたる1894年から1904年までの約1,700通の書簡をすべて閲読した。というのも、私はここ数年、デューイがシカゴ大学に開設したいわゆる実験学校について研究を進めてきたからである⁵⁾。これらの書簡の閲読を通して、私は実験学校の開設に至る経過や、実験学校とデューイとの関係、実験学校の実際の運営や実験学校と大学当局との関係、さらにはデューイがシカゴ大学を辞職する直接の原因となった実験学校の運営をめぐるさまざまなトラブルについて、かなり詳細な事情を理解することができた。

デューイのシカゴ大学時代の活動については、既にいくつかの先行研究によってその詳細が明らかにされている。以下では、それらの先行研究と重ならない範囲で、シカゴ大学時代のデューイ関係の書簡から知られるシカゴ大学時代のデューイの活動の特徴的な諸側面を取りあげることにしたい。

1. ミシガンからシカゴへ

シカゴ大学からの招聘受諾

デューイがミシガン大学からシカゴ大学へ転任することになった経緯については、既にマッコールやダイキューゼンの研究に詳しい⁶⁾。

デューイは1894年2月15日付でハーパー学長宛てに招聘受諾の手紙を出している⁷⁾。その際、彼はハーパーが提示した年俸4,000ドルでは不足だと述べ、初年度は9カ月の休暇が与えられるから我慢するが、次年度からは年俸5,000ドルに増額するよう要求している。

3月5日付のハーパー学長宛ての手紙でも、デューイは7月1日からシカゴに着任すると約したうえで、年俸4,000ドルではシカゴのような大都会で家族を満足に養えないと再度訴えている⁸⁾。

シカゴ大学は3月10日の理事会で、デューイを7月1日から年俸4,000ドルで、次年度からは年俸5,000ドルで、哲学科主任教授 (Head Professor) に採用することを公式に決定した⁹⁾。

翌日の3月11日にデューイは、シカゴ大学哲学科の助教授 (Assistant Professor) で彼をシカゴに招聘するようハーパー学長に進言したジェームズ・タフツに手紙を書き、その中で彼は、2年目に5,000ドルへの増額がなければシカゴに行かないというのは本気ではなく「ちょっとした駆け

引き」(a sort of bluff game) だったと書いている¹⁰⁾。

新しい哲学科の構想

シカゴへの転任が正式にきまると、デューイはただちに哲学科の人事構想に着手した。シカゴ大学は、中西部を代表する本格的な大学院大学として1892年に開学した。この大学では各学科の主任教授は学科の教学権、人事権、予算権を一手に握るいわば領邦君主であり、同時にそれぞれの学問分野で最先端の研究を組織しリードできる高い力量が要求されていた。デューイは弱冠34歳ながら、哲学科の初代主任教授として、新生シカゴ大学の哲学科を自分の思いどおりに構築する権限を与えられる一方で、シカゴの哲学科をハーバードやイエールなどのいわば老舗の名門哲学科と十分に競争できるものにするという責務を負ったわけである。

デューイ着任以前、シカゴ大学の哲学科には上述のタフツと心理学担当の准教授 (Associate Professor) であるチャールズ・ストロング (Charles A. Strong) の2人が前年10月から着任していた。3月26日付でアナーバーから出したタフツ宛ての手紙で、デューイは哲学科の人事構想を伝えている。その中で、論理学・心理学・倫理学を担当する助手 (Instructor) を一人採用することと、実験心理学を担当するスタッフを2人採用できる見込みがあることを述べ、そのうちの一人としてミシガン大学哲学科でデューイのもとで助教授をしている G.H. ミード (George Herbert Mead) をそのままシカゴに連れていきたい考えを述べている。もう一人のスタッフについては、心理学実験で名のある人物を、できれば外国で見つけたいとしている¹¹⁾。そして、ミードの実験心理学のコースを発足させるに際しては、シカゴ大学の神経学の教授であるヘンリー・ドナルドソン (Henry Herbert Donaldson) および当時シカゴ大学で生理学を教えていたドイツ人のジャック・ローブ (Jacques Loeb) の協力を得たい考えを述べている¹²⁾。ここには、シカゴ大学哲学科を哲学と実験心理学との密接な関係のもとに組織したいと考えるデューイの意気込みが感じられる。

さらに同じ手紙でデューイは、社会学科 (Department of Sociology) のアルビオン・スモール (Albion Woodbury Small) が彼の倫理学のコースを哲学科にも解放してよいと言っていること、受講者が多くなれば神学部 (University of Chicago Divinity School) の教会社会学 (ecclesiastical sociology) の教授であるチャールズ・ヘンダーソン (Charles Richmond Henderson) にもスモールから協力を依頼してくれると言っていること、そして「開講科目は多ければ多いほどよい」と述べて、ヘブライ哲学を教えるハーパー学長とユダヤ教ラビ文学・哲学 (rabbinical literature and philosophy) の教授であるエミール・ハーシュ (Emil Gustav Hirsh) にもデューイ自ら協力を依頼するつもりでいると記している¹³⁾。そこには、哲学科のカリキュラムを構想するにあたって、デューイが履修科目を哲学、倫理学、論理学などのオーソドックスな専門科目に限定せず、他学科の協力を得て幅広い関連科目を用意することを考えていたことが示されている。実際、シカゴ大学の1895-1896年度の『大学年報』に掲載されている哲学科の開講科目を見てみると「他学科の関連科目」という項目のもとに、かなりの数の他学科開設科目が用意

されていることがわかる¹⁴⁾。そこには、社会学、人類学、比較宗教学、セム語・セム文学、ギリシア語・ギリシア文学、ラテン語・ラテン文学、英語・英文学などの人文・社会科学の諸科目のみならず、動物学、植物学、生理学、神経学などの自然科学の諸科目も含まれている。

3月27日付のハーバー学長宛の手紙で、デューイはミードの採用を働きかけた¹⁵⁾。ところが、ハーバー学長からは実験心理学の開設を1年待つて欲しいとの返事があり、デューイは困惑している。4月10日付のハーバー学長宛の手紙で、彼は実験心理学を欠けば他大学との競争に後れをとると警告し、既にハーバード、プリンストン、コロンビア、コーネルといった競争相手はもとより、ウィスコンシン、スタンフォードといった格下の大学でさえも、実験心理学に充実したスタッフを擁していると訴えている。そして、再度ミードの採用を働きかけている¹⁶⁾。

妻アリス宛の手紙

1894年5月19日にデューイの妻アリスは、第一子のフレデリック (Frederick Archibald Dewey) と第二子のエヴリン (Evelyn Riggs Dewey) を連れて、マニトバ号という客船でニューヨークからロンドンに向けてヨーロッパ旅行に出発した¹⁷⁾。1歳7カ月になる第三子のモリス (Morris Dewey) はミシガン州レイピア (Lapeer, Michigan) に住む母ルシナ (Lucina A. Rich Dewey) のもとに預け、デューイ自身はミシガン大学のあるアナーバー (Ann Arbor, Michigan) にとどまってシカゴ行きの準備をおこなった。そして、7月にシカゴ大学に赴任したあと、12月にモリスを連れて渡欧し、アリスたちと合流して家族でヨーロッパ旅行をすることにしていた。デューイとアリスは再会するまでの約8カ月間、お互いにはほとんど毎日のように手紙をやりとりしている。

その中でデューイは、ミシガン大学の同僚で哲学科の講師 (lecturer) をしているアルフレッド・ロイド (Alfred H. Lloyd) がエンジェル学長 (James Brill Angell) からどこか別のところに職を見つけるよう通告されたことについて、アリスに知らせている¹⁸⁾。理由は、彼の授業が学生に不評だということであった。デューイとロイドは単に哲学科の同僚というだけでなく、同じニューイングランドの出身であり、アナーバーではもう一人の同僚であるミードともども近所に住み、お互いに家族ぐるみのつきあいをしていた¹⁹⁾。そうしたこともあって、デューイはロイドのことを心底から気づかい、アリスへの手紙でロイドのことについて頻繁に書いている²⁰⁾。結局、ロイドはミシガン大学を辞職することになる²¹⁾。

デューイは、同じ哲学科の同僚のうちミードについては一緒にシカゴに連れていくことを熱望しながら、ロイドについてはミシガンに残ってミードの後任として昇進するか、またはどこか彼にふさわしい大学に職を得られることを期待した。デューイはロイドの能力を高く評価していたけれども、新天地シカゴでの自分の哲学の発展にとっては、観念論的形而上学に傾斜するロイドよりも、生物科学に基礎をおくミードの方が貴重だと判断し、ロイドをシカゴに連れていく考えはなかった²²⁾。

デューイは5月14日付のアリス宛ての手紙の中で、ミードにくわえて、ミシガン大学での自分の

教え子でミネソタ大学にいるジェームズ・ローランド・エンジェル (James Rowland Angell) も、シカゴ大学に採用してくれるようハーパー学長に申し入れたと書いている²³⁾。エンジェルは、ミシガン大学を卒業後、ドイツで心理学を学んだ実験心理学者であり、やがてシカゴで機能主義心理学をうちたてることになる。デューイが描くシカゴ大学の新しい哲学科の構想の中には、やはりロイドは入らなかったようである。ちなみに、エンジェルはミシガン大学のエンジェル学長の息子であり、そのエンジェル学長はデューイがまだ子どもだった頃、パーソントンにあるバーモント大学の学長をしていて、デューイのことをよく知っていた。

シカゴのハーパー学長からはしばらくのあいだなんの返事もなく、デューイはいらだっていたが²⁴⁾、結局ミードとエンジェルは二人ともシカゴに行けることになった²⁵⁾。

アリスは5月30日にロンドンに到着し、すぐにパリに向かい、そこに滞在した²⁶⁾。

6月1, 2, 3日付のアリス宛ての手紙の中で、デューイはエンジェル学長にミードがシカゴに行くことになったことを報告し、その際、ミードの空席にロイドを昇進させられないかとそれとなく打診したが、エンジェル学長にはその気はなかったと書いている²⁷⁾。

同じ手紙で、デューイはシカゴ大学のハーパー学長が東部で開かれたバプティスト派の会議でおこなったスピーチの新聞記事について触れ、「もし彼が本当に記事にあるようなことを述べたとしたら、きっときみは身震いするだろう」と書いている。というのも、ハーパーはそこで、アメリカの大学に広がる世俗主義を憂えたうえで、不可知論者の跋扈を許さないために、シカゴ大学への支援を惜しまないでくれと訴えたからである。ちなみに、シカゴ大学はもともとバプティスト派の宗派立大学 (denominational college) であった。しかし、デューイは、ハーパーがその前の週にはシカゴのリベラル派の会議で熱弁をふるったばかりだったことから、これはバプティスト派の会議でのハーパーお得意のリップサービスだろうと考えて、シカゴ大学のリベラルな研究者たち、および彼らを支援するハーパー学長への信頼を表明している²⁸⁾。

デューイは、6月13日付のアリス宛ての手紙で、いよいよ明日がミシガン大学での最後の授業になると書き送っている。そして「この狭小な泥沼から逃れ出られるかと思うとせいせいする」と述べ、「これからは活気あふれるシカゴの一員になるのだ。ここ [ミシガン大学] のようにだれもが何でもあら捜しをしているような不毛の地をあとにするのは救いだ」と、ミシガン大学を去るにあたっての率直な気持ちを妻に伝えている²⁹⁾。

また、シカゴに向かう直前の6月25日付のアリスに宛てた手紙では、ミシガン大学のエンジェル学長があいかわらずロイドを昇進させるつもりがないことを残念がっている。そして、デューイ、ミード、ロイドが抜けたあとの哲学科の後任についてエンジェル学長にはあてがないようだから、自分の後任にシカゴ大学からタフツを招聘したらよいと思うが、もうミシガンのことについてはロイドのこと以外、これ以上あれこれ考えたくないと書いている。そのロイドについては、ミネソタ大学での非常勤の口もついていたと書いている³⁰⁾。

2. シカゴ大学着任

ブルマン・ストライキ

デューイは、6月26日にアナーバーを引き払って妻アリスの実家のあるミシガン州フェントン(Fenton)に行き、6月30日のたぶん夜行列車でフェントンからシカゴに向かった³¹⁾。おりしもアメリカ史上最大のブルマン鉄道ストライキの最中であった。デューイによれば、フェントンの駅員はシカゴ行きは大丈夫だと言っていたが、彼の乗った列車は途中のミシガン州バトルクリーク(Battle Creek)に7月1日午前2時に着き、そこに朝の9時まで停車させられ、さらにミシガン州ウィットコム(Whitcomb)でもしばらく停車させられ、午後になってストライキに参加していないミシガン・セントラル鉄道の列車に乗ってようやくシカゴに向かった³²⁾。

途中、デューイはミシガン州デューラント(Durand)で若い組合運動家の話を聞いて興奮し、いっそ大学の教師など辞めて彼についていこうかと思ったと、妻アリス宛の手紙に書いている³³⁾。この若い組合運動家は、各地を転々としながら草の根の組合組織を作っていく仕事をしていて、デューイはこの男のひたむきな情熱にすっかり魅了されたのであった。数年前、やはりデューイはフランクリン・フォードという男に出会ってすっかり意気投合し、この男と一緒に社会的真実の大衆啓蒙をめざすジャーナリズム事業に着手したが、失敗に終わっている³⁴⁾。このように、時々デューイは一風変わった、どちらかという個性の強烈な人物に惹かれることがある。後にデューイは、エイバー夫人という降霊術者に出会い、彼女に実験学校をゆだねたいと考えるが、実現しなかった。

それはともかく、デューイは手紙の中で「このストライキのように共通利害のもとにかくも広範な人々が連帯する光景を目にすることは、めったにないことだ」と高揚した気持ちを書いている³⁵⁾。そして、政府がやがてストライキに介入することになるのは明らかで、労働者たちはきっと処罰され、首謀者のユージン・デブス(Eugene V. Debs)は反逆罪に問われるだろうが、それでもこのストライキは偉大であり、さらなる前進の始まりになるだろうと、ストライキへの全面支持を表明している。

シカゴから妻アリスに宛てた最初の手紙の中で、デューイはハルハウス(Hull House)を訪ねた際、そのスター嬢(Miss Ellen Gates Starr)がストライキを熱烈に支持していることを知って、とても勇気づけられたと書いている。というのも、当地シカゴの新聞の論調は概してストライキに批判的で、大学人にもストライキに敵意や疑念をもっている人が多く、デューイとしては憂鬱な気分になっていたからである。手紙で彼は「知識人はたぶん資本家よりも質が悪いのだらう」と皮肉っている。そして、おそらくはハルハウスで聞いた話しからであろうが、「シカゴ大学は労働者にひどく評判が悪い」と書いている³⁶⁾。

これに続けてデューイは、州立大学のミシガン大学では宗教活動に一定の制限はあっても、社会問題については自由であったのに、このバプティストの大学(シカゴ大学)では表面上完全な宗教

的自由が認められながら、社会問題については大きな制約があると書いている³⁷⁾。赴任してわずか3日目のデューイのこの観察は正しかった。というのも、独占企業家のロックフェラーを後ろ盾とするシカゴ大学では、経済学准教授のエドワード・ベームス (Edward W. Bemis) がストライキのさなかにプルマン旅客鉄道会社を公然と批判する反独占の講演をおこなって大学当局と衝突するにいたり、翌年に解雇されるという有名なベームス事件が起こっているからである³⁸⁾。

このベームスについて、デューイは次のようにアリスに書き送っている。

疑いもなくハーバーは資本家の機嫌をそこねることを恐れ、学外からの資金に目がくらんで、ものごとが見えなくなっている。彼はベームスを2回呼び出して「気をつけたまえ」と警告した。その理由というのは、ガス会社の社長がベームスを首にしないかぎり、理事会に1セントたりともリベートを支払わないと言ったからである。ベームスは、ガス事業の市営化に関する事実を議会の委員会に示してガス会社を攻撃していた。ハーバーは無情にも、ガス会社のその傲慢な男ではなくベームスに「気をつけたまえ」と警告したのである。なんとということだ。ベームスは主任教授ではない。主任教授を首にすれば相当な補償が必要になる。兄のデイヴィスは、シカゴの資本家と労働者の間の階級感情に大いに驚いていた。ボストンでは階級感情などほとんどないそうだ。シカゴ大学の理事の一人が「ホームステッド・ストライキでのわれわれの側の勝利」と言ったので「われわれとはどちら側のことですか」ときくと「もちろん、資本家の側さ」と言った³⁹⁾。

7月9日付のアリス宛の手紙で、デューイは明日シカゴ市の全労働組合が連帯のストライキに突入すると知らせている。そして、クリーブランド大統領はシカゴ市に戒厳令を発するようだが、政府はそんなことをするよりもプルマンに少しでも圧力をかけるべきで、資本家の側もプルマンを生贄^{いけにえ}にして事態を収拾するほうが得策だろうと書いている⁴⁰⁾。

また、7月14日付のアリス宛の手紙では、ストライキは鎮圧されたけれども、労働側は実質的に勝利したと見てよいとデューイは述べている。なぜなら、このストライキで広範な労働者たちが連帯して行動できたことは「上流階級」の人々に衝撃を与え、一般大衆には大衆行動のよい模範を示したからで、これによって「社会を有機体と見る考え」(the social organism thinking) が広がればよい、とデューイは書いている⁴¹⁾。

さらに7月20、21日付のアリス宛の手紙でも、プルマン・ストライキについて論評した *Harper's Weekly* 誌の論説と記事を同封して、そこに書かれているような社会主義者が騒乱を起こそうとしているといった類^{たぐい}のことは金持ち階級の見方であり、自分が目撃したかぎりではそうした事実はなく、結局 *Harper's Weekly* 誌は金持ち階級のジャーナルであり、シカゴ大学は「資本家の大学、上流階級の教育機関」であると書いている⁴²⁾。

なお、7月28、29日付のアリス宛の手紙で、デューイはアリスがストライキについて書いてきたことはまったく正しいと述べて、今となってみれば今回のストライキは成功の見込みのない短慮な企てだったと書いている⁴³⁾。だが、アリスがデューイに書き送ってきた当の手紙は存在が確かめられていない。

その後も、デューイはアリスにプルマン・ストライキ関係の新聞、雑誌の記事を送っている⁴⁴⁾。

さらに、ストライキ後のシカゴの政治状況に関連して「人民党」(The Populist Party)の勢力が拡大していることや、「市民連盟」(The Civic Federation)の活動についてもアリスに伝えている⁴⁵⁾。

シカゴ大学とハーパー学長

デューイは、妻アリスに宛てた手紙で、着任早々のシカゴ大学の雰囲気についていく度となく書き送っている。ブルマン・ストライキに関連して既に紹介済みのものもあるが、それ以外のものを以下に見てみよう。

7月9日付のアリス宛の手紙で、デューイはハーパー学長の学内での評判について次のようなことを書いている。ハーパーは、研究スタイルとして歴史的方法、帰納的方法、実験的方法を理想としているので、神学校(Theological Seminary)の守旧派の教授陣からは反感をかってい。しかし、神学校の学生たちは新しい知的栄養に飢えているので、哲学は彼らの神学上の懐疑論に最も豊かな資源を提供できるだろう。このようにデューイは、ハーパーのユニバーシティ(研究大学)の理想を支持し、自分もユニバーシティ(研究大学)の哲学教師として何がしかの貢献をするつもりだと決意を示している⁴⁶⁾。

デューイは、7月16日に初めてハーパー学長と短い会見をしたことを妻に伝えている。そのうえで、大学内にはハーパー学長の独断専行に対する不満の声があるようだが、今のところ自分には関わりがないことだと書いている。そして、大学内のいざこざはハーパーその人によるよりも、むしろ主任教授とそれ以外のスタッフとの間の軋轢にあるように見えると述べ、自分は哲学科の主任教授だが、パンチ(酒)とタバコで学科の人間関係を固めるつもりだと冗談をとばしている⁴⁷⁾。10年後、デューイは教育学部長としてハーパーの不誠実な経営手法に対する不満を爆発させてシカゴ大学を自ら去ることになるのだが、そのデューイも着任当時はハーパーにむしろ好感をもっていたことがわかる。

7月19日付の手紙では、ハーパー学長は研究費を多く要求する人をそれだけ研究意欲旺盛な人と見なすという評判を聞いて、デューイは自分も研究費獲得競争に乗り遅れないようにすると決意を述べている。そして「この大学はエネルギーに満ちており、だから傑出した名声を得たのだと思う」と付け加えている⁴⁸⁾。

着任後1カ月がたった8月5日付のアリス宛の手紙で、デューイは再びハーパー学長の独断先行に対する学内の不満について書いている。すなわち、ハーパーは新生シカゴ大学の出発に当たってたくさんの計画を抱えて時間がなかったのも、一部の代表者の意見を聞くだけでものごとを決めてきたが、もうそろそろ下部の意見を聞いて計画を進める時期が来ているというのが、おおかたの教授陣の一致した意見になっていると⁴⁹⁾。

授業担当について

デューイは着任早々の7月3日には授業をおこなっている。そして、9時30分からの授業が週4コマと11時30分からの授業が週2コマあり、大学には週4日行くだけでよく、すべて午前中だと妻アリスに知らせている⁵⁰⁾。

実際の授業について、デューイはアリスに次のように書き送っている。「私は6人ないし8人の学生をもち、全員大学院生で年齢もかなりいつている。大人数で出席もルーズな授業から逃れ、細部をより明確にしていくような授業ができることは、予想していた以上に快適なことだ⁵¹⁾。」デューイは主任教授としての特権を行使して、自分のごく限られた少人数の学生の授業をもち、一般の授業はタフツとミードに任せることにしている。「夏学期の経験から、私は主任教授の利点を生かして、私の授業を取りたいと希望する学生たちを無慈悲にも追い払うことにした。なかには『デューイ教授、あなたは来期からしばらくいなくなるそうですから、ぜひ授業を取らせてください』と言って来る学生もいる。わがままをして、私は8人程度の大学院学生の授業を2つもっている。選り好みをしたので、かなり粒ぞろいの学生だ。こうした排除策を取り、学生を一人前に鍛えることをタフツとミードに任せて、私はもっと限定的な指導をしたいと思っている。とにかく、種をまく仕事は億劫^{おっくう}になってきた⁵²⁾。』

デューイは、ミードの論理学の受講者が60人を越えたことに関連して、ミシガンであったらクラスを分けてミードにもう4時間授業を負担してもらおうところだが、シカゴでは競争原理があるから、ハーバー学長に哲学科はこれだけ受講者が多いと実績を示せばもう一人講師が必要だと申し出ることができるとアリス宛てに書いている。しかし、ハーバーもさる者で、講師を一人採用する代わりにミードに授業を負担してもらい、その代わり彼に4週間の休暇のクレジットを与えるという提案をしてきた。ミードは前向きな返事をしたらしいが、商都シカゴでは何事も取り引き(dicker)だとデューイは書いている⁵³⁾。

非常勤講師の仕事

デューイは10月の秋学期(Autumn Quarter)から大学拡張部(University Extention)で現職教員向けの土曜講座(Saturday class)を受けもつことになった。このことについて、デューイはアリスに次のように書いている。「25人受講すれば200ドルにはなるだろうと思う。もし教員向けの夜間講座を開くとすれば、これはシカゴで最も手近な儲け口になる。私の夏学期の授業にはシカゴの男性教員が3人いて、心理学を学校の教室と結びつけることにとても興味をもっているようだ。いま全国で心理学を敬虔な願望と結びつけるスタンレー・ホール(G. Stanly Hall)がもてはやされている。フォーラム誌のここ3、4号に連載されているから、そちらで読むことができたら読んでみたまえ。きっと吐き気がするよ。ジェームズ(William James)が“ホールは生^{なま}の事実を敬虔な教えと結びつけてわれわれの文化に害を与えた”と手紙で言っていたことがますます明白になってきた⁵⁴⁾。』

先に見たように、デューイはシカゴ大学の新しい哲学科を構想するにあたって、哲学を実験心理学と結びつけようとしていた。それは哲学を宗派立カレッジの宗教的形而上学から解放して、新しいユニバーシティの学問として確立するためにデューイがとった「哲学の方法」(philosophic method)であった。それゆえに、かつてジョンズ・ホプキンスの大学院でデューイの関心を実験心理学へと向けさせた恩師ホールが、心理学を再び宗教に結びつけようとしていることが彼には許せなかったのであろう。

デューイは8月26日にシカゴ大学クリスチャン・ユニオンで「心理学と宗教」と題する講話をすることになったが、彼はこの機会に自分が異端であることを知らしめるつもりだと妻アリスに書いている⁵⁵⁾。そして、講話では哲学に宗教感情の覚醒を期待しても無駄だと述べた⁵⁶⁾。

他方、現職教員向けに心理学の夜間講座を開けば「シカゴで最も手近な儲け口になる」というのは妻へのプライベートな話だろうが、シカゴではそれだけ教員の間に心理学への期待と需要が大きいということであろう。デューイは冗談に「シカゴ大学を首になったら、ダヴィッドソン流に夏期講座を作って、小学校の女教師たち(school maams)を教えようかなと思う。実は昨日、市西部のある校区から9人の女教師がやってきて、ヘルバルト教育学を教える講座をやって欲しいという。しかし、私にはそんな残酷な仕事をする気はない(第一、身がもたない)」と書いている⁵⁷⁾。さらに、デューイは10月から大学拡張部の授業をもう一つ、クック郡師範学校(Cook County Normal School)でもおこなうことになった⁵⁸⁾。想像力(imagination)について講話をし、初回の受講者は約150人で、大部分が女教師たちだとデューイは書いている⁵⁹⁾。2回目の受講者は200人で、師範学校長のフランシス・パーカー(Francis Wayland Parker)は「人気があるから受講者が増えたんですよ」とデューイに言ったそうである⁶⁰⁾。

彼は既にミシガン大学時代から最新の心理学を学校教育の改善に結びつけることを考え「ハイスカールの心理学」の執筆を構想している。また、ミシガン大学時代からシカゴへの転任をはさんでアレクザンダー・マクレラン(Alexander McLellan)との共著で『数の心理学と算数教授法』(1895年)を執筆し出版している⁶¹⁾。その際、彼はヘーゲル論理学を現代の心理学へと読み替え、それを算数の教授法に応用することを考えていた⁶²⁾。

要するに、デューイはミシガン大学時代以来、一方で哲学を心理学と結びつけて宗教から解放し、他方で心理学を学校教育の場にもちこむことで自分の哲学理論の有効性を確かめようとしていたのである。こうして、哲学と心理学と教育学を結びつけるデューイの大胆な構想がシカゴ大学を拠点にして展開されることになる。シカゴはアナーバーよりもはるかに大都会であり、現職教員向けの講座の需要も格段に大きくなれば、デューイにとっては格好の条件であったに違いない。彼は、シカゴ大学哲学科に心理学実験室を設けるとともに、現職教員向けの大学院課程として教育学科を併設し、そこに応用心理学の実験室としての学校(実験学校)を開設したのである。

3. 実験学校の開設に向けて

学校参観——特に、フランシス・パーカーのクック郡師範学校について

デューイは7月のシカゴ着任後、市内のいくつかの学校を精力的に訪れている。これは研究関心によるばかりでなく、実は欧州旅行から戻った際、自分の2人の子どもの学校をどうするかというプライベートな問題もあって、評判のある学校をいくつか見て回るという意味もあったようだ。彼は10月18日付のアリス宛ての手紙で「私はできるかぎり時間をとって、どこかわれわれの気にいるところはないかと幼稚園教員養成所と1, 2のすぐれた小学校、それにフランシス・パーカーの師範学校を見て回っている」と書いている⁶³⁾。

まず7月26日に、デューイはシカゴで一流の女子寄宿舎学校を経営するローリング夫人 (Mrs. Loring) に夕食に招かれ出かけている。このお嬢さん学校について、デューイは前からあまり良い印象をもっていなかったが、ローリング夫人は会ってみると知己を得るに値する人物だったと書いている⁶⁴⁾。

次に、8月1日にデューイはシカゴ幼稚園カレッジ (The Chicago Kindergarten College) を訪問し、クローズ夫人 (Mrs. John N. Crouse) とエリザベス・ハリソン嬢 (Miss Elizabeth Harrison) に会っている⁶⁵⁾。実は、この幼稚園カレッジは、1886年に先のローリング夫人の寄宿舎学校の敷地にハリソン嬢が幼稚園教員養成所として設立したのであった。この幼稚園カレッジについてのデューイのプライベートな論評はなかなか手厳しい。

幼稚園“カレッジ”は夏期講習を開いているので、私は彼らの実践について講話を聞くことができたが、とにかく恐れ入った。いくら幼稚園だからといっても、大の大人が気持ちばかりか考え方まで幼い子どもみたいに天真爛漫になる必要があるのだろうか。ハリソン嬢は大人の受講者に向かって幼稚園の説明をするのに、まるで子どもたちに話をするみたいに、黄色い猫撫で声で教え諭していた。彼女がいい仕事をしていることは疑われないが、部外者にはちょっと知能が足りないのではないかとしか見えない⁶⁶⁾。

さらにデューイは、ハリソン嬢がハリス、スナイダー、デューイの心理学などを通してヘーゲル哲学を幼稚園教育に応用しようとしていることについても、正・反・合の最後の統合は多かれ少なかれ敬虔的で教会向きになっていると断じ、子どもらしい子どもなんてものがどこにいるのか私にはさっぱりわからないと述べている⁶⁷⁾。このようにデューイはいわゆる童心主義の幼児教育思想に辟易としており、彼が設立する実験学校と彼の教育理論の性格を理解するうえで、この点は興味深い。

なお、デューイは先のクローズ夫人からの依頼で、9月27日にシカゴ幼稚園カレッジで開催された母親大会に出席し、お母さんのための心理学について講話をおこなっている⁶⁸⁾。

デューイは、シカゴ・フレーベル幼稚園協会立教員養成所 (Chicago Froebel Kindergarten Association Training School) のプットナム夫人 (Alice Harvy Whiting Putnam) とともに交流

があり、幼児教育について彼女と意見を交換している。プットナム夫人はパーカーのクック郡師範学校でも幼稚園の主事 (director) をしている。デューイは夫人に、フレーベル主義が扱うシンボルは活動のシンボルではなく、観念や情動のシンボルだから、とても危険なものではないかと疑問を呈した。これに対して夫人は、幼稚園での情操の育成と過剰刺激、さらには明確な理論と情動の注入にかなり肯定的だった。夫人は実はスウェーデンボルグ主義者であることがわかったとデューイは書いている⁶⁹⁾。ちなみにパーカーもフレーベル主義者であり、デューイがフレーベル主義に一定の疑問をもっていたことは、後にパーカーとデューイが同じく児童尊重を唱えながらも、両者の間の路線の違いとなって現れてくる。

デューイは11月1日付アリス宛ての手紙で、パーカーのクック郡師範学校を見学したときの様子をかなり詳しく報告している。

1年生からどの学年の教室にも鳥やリスが飼われていて、なかには小さい水槽のある教室もあり、また岩石の標本はすべての教室に備えられている。学校全体は“自然学習” (nature study) の原理にそって組織されている。読みはもっぱら書くことで学ばれている。子どもは自分が見たことや話したい事柄について書く。もし単語がわからなければ、教師が黒板に書き、すぐに消す。子どもはいつも文脈のなかで使わなければならないとき以外に単語を教えられないことはない。この日常感覚に近いやり方はよく効果をあげているように見える。子どもは、人目に出来栄を気にすることもなく、自由にのびのび腕を動かして、最初から大きく素早く書いていく⁷⁰⁾。

この読み書き学習のやり方は、後にデューイの実験学校でも実践されるが、高学年になるにつれて子どもたちの間の読み書き能力にばらつきが生じるようになり、結局伝統的なドリルで補習せざるをえなっている。それはともかく、デューイは続けてこう書いている。

パーカーが実習のクラスにやってきて、私が講義した心理学原理のうちどれでもいいから、どこでどういうふうに応用したか説明せよと学生たちに言った。私は、彼らが私の心理学原理から学ぶよりも、むしろ私が彼らの実践例から心理学を学びなおすほうがずっと大きいのにと思った⁷¹⁾。

これはパーカーに対する皮肉で言っているのではないだろう。なぜなら彼は、この時期、マクレランとの共著に見られるように、ヘーゲルの論理学を心理学理論として読み替え、それを学校の授業方法の改善に応用することで、ヘーゲル哲学の実際的な意味を確認しようとしていたからである⁷²⁾。続けて彼はこう書いている。「私は、自分が教育評論家にむいているのではないかと思う。哲学を直接教えることをやめて、教育学 (pedagogy) を媒介にして哲学を教えようかと時々考えることがある⁷³⁾。」ここでデューイが「教育学を媒介にして哲学を教える」と言っていることは、後に彼がシカゴ大学でおこなう『教育哲学講義』(1899年)⁷⁴⁾となって姿を表し、それが後の『民主主義と教育』(1916年)⁷⁵⁾に結実する。

デューイは11月20日付のアリス宛の手紙でも、クック郡師範学校の小学校を訪問したことを再び

報告している。

昨日は午前中、クック郡師範学校の小学校を訪問した。読み・書き・スベルの問題は形式的な側面に関しては完全に解決されている。しかし、それ以外では“自然”を人間生活ではなく物的対象として学習するようにしている⁷⁶⁾。

学習素材としての「自然」の取り上げ方にやや問題があると批判している。デューイは「自然」も人間の社会生活を構成する要素として扱ってこそ、子どもたちの学習の内容になりうると考えているわけで、彼の教育内容論は最終的には社会生活の理解と道德性の形成に向けられている。そうした観点から見て、デューイはパーカーのクック郡師範学校のやり方に一定の不満を感じたのであろう。

なおこの訪問の際、デューイはパーカーから大学と提携関係を結びたいという申し出を受けている。その提携とは、師範学校が大学の教育実習を引き受けるかわりに、大学は師範学校の心理学の授業を引き受けるというものであったが、デューイはしばらく待つて欲しいと即答を避けている⁷⁷⁾。

デューイの理想の学校像

さて、デューイは11月1日付の手紙でパーカーのクック郡師範学校の報告に続けて、彼自身がこの時点で抱えている理想の学校の姿について妻アリスに書き送っている。そこには、後に実験学校で取り組まれる教育実践の最も原初的なイメージが語られている。

このところずっと私の頭の中には一つのあるべき学校像がふくらんできている。その学校では、実際の文字どおりの構成的活動 (constructive activity) が中心に置かれ、すべてはそこを起点にして始まり、2つの方向へと成長していく。一つは構成的活動にともなう子どもたちの社会性の側面、もう一つは構成的活動に材料を提供する自然との関わりである。私が理論的に構想しているのは、模型の家を作る大工仕事が一方で社会性の訓練になり、他方で科学の訓練になるとともに、肉体的にも眼と手の積極的で具体的な習慣の獲得につながることである。そうした学校の教育内容と教育方法については、いまのところまだ漠然としている。幼稚園運動の教育方法、手工教授法 (manual training)、自然学習 (nature study)、中心統合法 (coordination of studies) などなど。学校は一つの抽象化され統制された社会生活体であり、まさに実験的な社会生活体と言える。もし哲学が実験科学になるとしたら、学校の建設こそ出発点である⁷⁸⁾。

これに続けて、デューイはこの種の教育は自分たちの子どもにとっても救いになるものだとアリスに告げている。

この一般的な理論化は、私たち自身の子どもに通える学校が見つからないとき、救いになる。しかし、大部分はモリス〔末子〕のような幼い子どもの示す絶対的に正常な知性を大事にしたいという私自身の思いから発している。そして一部分には、子どもたちがありきたりの学校から逃れられたら嬉しいということもある。君が子どもたちの悪行について言っていることはわかるし、彼らにはいま学校に行く癖をつけることが必要だと私も思う。しかし、少なくとも彼らは彼ら自身の知性をもっているのだし、彼らなりの判断というもの

もある——彼らの同年齢のたいていの子どもたち以上にそう言える。憎むべきことは、彼らがこうした利点をもつがゆえに不利益をこうむり、彼らが知るよしもない不幸を負うような目にあうことである⁷⁹⁾。

デューイは自分の子どもたちが普通の学校に通うことになったら、かなりの困難ないし不適応を起こすだろうと見ている。もちろんここで普通の学校というのは、当時のすし詰め教室でおこなわれている画一的な復唱 (recitation) 中心の教育をおこなっている学校のことである。自分の子どもたちをこのような学校に入れたら、彼らの「正常な知性」はだいたいにされてしまうだろう。デューイが理想の学校を思い描き、やがて自ら実験学校を開設することになった背景には、このようなデューイの父親としての思いと、強烈な公立学校不信があったのである。

教育学科と実験学校の開設に至る経緯

デューイは11月20日に哲学科の次年度の計画を説明するため、ハーパー学長と会見することになった。その際、彼は「教育学」(pedagogy) の開設を強く要望した。「私は彼に、心理学と倫理学を少し強化するだけで大きくて素晴らしい可能性が開けると申し入れるつもりだ。彼は専門的教育学者 (professional pedagogues) を擁する独立の教育学科 (department of pedagogy) を作りたいと考えているようだ。もしそうなら、私のもくろみの4分の3は実現するだろう⁸⁰⁾。」デューイは、アリス宛の手紙にこう書いたところでペンを置き、ハーパーとの会見に出かけている。

もともとデューイが着任する時点で、シカゴ大学哲学科は心理学と教育学をも合わせもつ複合学科として設置されていた。そして、教育学の准教授としてジュリア・バルクリー (Julia E. Bulkley) という人物が採用されていたが、任命後の1892年8月にスイス留学に出かけ、デューイが着任したときにはバルクリーはまだ不在であった⁸¹⁾。

ハーパーは最初から強力なスタッフを擁する教育学科を構想していたようで、バルクリーが留学に出発する前の1892年7月の時点で、チャールズ・ドゥガーモ (Charles DeGarmo)、ウィルヘルム・ライン (Wilhelm Rein)、G. スタンレー・ホール (Ganville Stanley Hall) といった大物の獲得に動いている⁸²⁾。しかし、大物の獲得はいずれも実現せず、バルクリーも不在で、デューイが着任したときには、教育学はまだ開店休業状態にあったのである。それで彼は次年度の計画として、心理学と倫理学に多少の手当てをしてくれれば教育学は十分開始できると申し入れたのである。もちろんそこには「教育学を媒介にして哲学を教える」という彼個人の希望もあったであろう。だがそれ以上に、ハーパー学長が強力な教育学科を望んでいたことはデューイにとって何よりの収穫だったに違いない。

実際、ハーパー学長はデューイとのこの会見で独立の教育学科をつくることと、そこの主任教授にデューイをあてることを約束した。そのうえで、デューイの要望を入れて教育学科に実験学校を設置することも認めた。シカゴ大学実験学校の開設が決まった瞬間とも言える興味深い会見である。この会見でのハーパー学長とのやり取りについて、後日デューイはアリスに詳しく報告しているの

で引用しておこう。

思っていた以上にハーパー学長とは意見が一致した。彼は私の望みは「教育学」だと思っていたのだろう。一方、彼が求めているのはその道の専門家による教授法（methods of teaching）の教育だった。彼の教育学科構想は、最終的には各分野からなる5, 6名のスタッフがいて、大学でそれぞれの分野の教科を教え、ミシガン大学が始めているような学校調査と報告をおこなうとともに、それぞれの分野の教授法について教員志望学生を教えるというものである。ハーパーは若いスペシャリストたちの教育能力には完全に失望したと言っており、時折、もうドイツ帰りの Ph. D. はいらないと言っている。さらに彼は、大学近在の進学準備向けのアカデミーのうち1校を大学に併合して、ハイスクールのモデル校兼教育実習校とするつもりでいる。彼が独立の教育学科を欲していたのは、これをおこなうためであった。独立の教育学科は実質的には私も考えていたことであったから、もちろんわれわれは独立の教育学科をつくることですぐに意見が一致した。そして、私がその長（head）になることになった。私はハーパーの構想に追加して、単にカレッジとハイスクールの教員養成をおこなうだけでなく――本当は、私はこれにはさして関心はないのだが――自ら教員の指導にあたることのできる教育長（superintendents）の養成をおこなうことと、そのためにわれわれの指導のもとに文字どおりの実験をおこなう学校（a complete experimental school）をつくる必要があると提案した。彼はこれに同意し、私が望むなら次年度にスタートさせると言った。欧州旅行に出かけないのであれば、すぐにでもそうしたいところだ⁸³⁾。

デューイは、シカゴに来てからいろいろな学校を見て回らる中で、自分の理想とする学校のイメージをおおまかな形で描いていたが、ついにそれをシカゴ大学教育学科の実験学校として実現する機会を得たわけである。それにしても、ハーパー学長との会見で見せたデューイの交渉力は巧みである。デューイはハーパーが独立の「教育学科」を欲していることをあらかじめ承知したうえで、あえて「教育学」の開設を要求し、ハーパーの方から「教育学科」構想をもちだしたところで、自分の「教育学科」構想と実験学校をそれに追加させたのである。彼のもくろみは「4分の3」どころか完全に実現したのだ。しかも妻アリスへの手紙の中で「フレッドとエヴリンの教育のために大学を利用できるとなれば、ロックフェラー氏のスタンダード・オイルも何がしかの役に立つというものだ⁸⁴⁾」と書いているように、自分の二人の子どもにいまだかつてない教育を提供する学校も確保できたわけである。

当初のハーパーの構想では、教育学科はカレッジとハイスクールの教員養成を目的とするもので、そのために「教授法の教育」とモデル・スクールでの実習が主たる任務になるはずであった。おそらく、これは学生たちの就職先として中等レベル以上の教員をハーパーは想定していたためであろう。これに対してデューイは、主として現職教員を対象にして、教育長などの教育専門職の養成を目的とする教育学科を構想していた。彼は、現職教員の間に師範学校の教育に飽き足らず、大学レベルの教育を求める大きな需要があることを承知していた。デューイのこの構想に対しては、ハーパーも大学経営にプラスになると見て乗ったわけである。いずれにせよ、シカゴ大学教育学科をたちあげるに際して、両者は師範学校の領分である初等教員養成は考慮外に置き、ねらいを中等レベル以上の教員養成と教育専門職の養成という、当時としては新規分野への参入に置いたわけである。

そして、デューイ個人としては初等教員養成はもとより、中等レベル以上の教員養成にも関心がなく、彼の関心がもっぱら教育専門職養成に向けられていたことは、その後設立される実験学校の性格を理解するうえで重要である。実験学校はたとえ初等段階の学校であったにせよ、目的としては教育理論の実験的研究にあり、単なるモデル校や実習校ではなかったことは、後にデューイがしきりに強調するところである⁸⁵⁾。

デューイは同じ11月22日付のアリス宛の手紙で、ハーパーは実験学校を大学の近くに設置したいと言うが、自分としては実験学校が上流階級子弟向けの学校になるのは御免だから、市の西部の貧困地区に開きたいと答えたと書いている⁸⁶⁾。市西部の貧困地区とは、おそらくハル・ハウスのあるあたりを想定していたのであろう。しかし、実際には実験学校は大学近くに開設され、もっぱら大学関係者の子弟が通うインテリ好みの学校となる。

ハーパーとデューイは12月初めにも教育学科の件で話し合っている。その時ハーパーは「2時間で教育学科の全体を組織した」とデューイはアリスに報告している。「教育学科は次年度にスタートする。彼はすっかりやる気になっていた。彼を止めるものは何もなかった。私は幼稚園部門とグラマー部門は願い下げにしてもらったが、カレッジ部門とハイスクール部門と初等部門は次年度からスタートする。彼のてきぱきした行政手腕はまるで芸術作品を見ているようだ⁸⁷⁾。」なぜ幼稚園部門とグラマー部門は願い下げにしてもらったのか、その理由は書かれていないが、おそらくデューイ自身、フレーベル主義の幼稚園運動には批判的だったことと、グラマー・スクールやアカデミーのような大学進学準備学校の教育にはまったく興味がなかったことによるのだろう。ちなみに、実験学校には後になってから、幼稚園ではなく“sub-primary department”つまり就学前教育部門が設けられている。

4. エイバー夫人

デューイは、先の11月22日付アリス宛ての手紙でハーパー学長が実験学校の開設に同意したことを知らせる中で、「エイバー (Aber) 夫人について私の決心がつけばの話だが、小学校段階 (primary grades) の発足は彼女に委ねたいと思う」と書いている⁸⁸⁾。このエイバー夫人 (Mary Rose Alling Aber) という人は、1881年から3年間、ボストンのポーリン・アガシ・ショウ夫人 (Mrs. Pauline Agassiz Shaw) の学校で教鞭をとり、1886年にはクック郡師範学校で教えたこともある人物である⁸⁹⁾。

デューイはこのエイバー夫人に教師をしてもらうつもりだったのか、校長または主事 (director) をしてもらうつもりだったのか、その点ははっきりしないが、とにかく彼はこの夫人のユニークな教育論に興味をもち、ぜひともこの夫人に実験学校を任せたいと考えていたようである。「そうすればフレッドとエヴリンの二人を通わせる学校が確保できるだろう⁹⁰⁾。」彼は手紙の中でアリスにそう書いているくらいであるから、エイバー夫人の教育論にほだ惚れ込んでいたもの

と思われる。

だが、いったいこのエイバー夫人とはどういう人物なのだろうか。そして、デューイが興味をよせた彼女のユニークな教育論とはどのような教育論だったのか。それがわかれば、デューイが実験学校を開設するにあたって抱いていた理想の学校の姿が多少は理解できるだろう。

彼は既に11月15日付の手紙で、エイバー夫人のことを初めてアリスに紹介している。

エイバー夫人という女性が私のところで哲学を学んでいるのだが、その彼女が私に子ども向けの自然観察の本を2冊ばかりくれて、私の子どもたちのために使ってくれと言った。彼女は以前ボストンのクインシー・ショウ夫人の学校で教えていて、明らかに——といっても、彼女はあまり控えめな人ではないので眉唾まゆつばかもしれないが——自然学習（nature study）を基礎にして読み・書き・描画等を教えることを最初におこなった人らしい。タルボット嬢の話しでは、彼女はとても優秀な教師だが、とても“奇妙”な人物であるそうだ。タルボット嬢は次のような例を話した。「とにかくもう非常に変わっていますよ。貧民街で靴磨きを見たら、イエス・キリストかナポレオン・ボナパルトを見ていると思ひなさい、なんて言うんです。」タルボット嬢は彼女のことを神智論者（theosophist）か心霊学者（metapsychosist）だと思っているようだ⁹¹⁾。

エイバー夫人についてさらに11月18日付の手紙ではこう書いている。

ポピュラー・サイエンス・マンズリーに載っているエイバー夫人の論文を読んでみた。コピーを注文したからそのうち君にも送る。彼女は、私たちが以前キャンプ嬢（Miss Camp）に期待した考えをはっきりもっている。今までに私が教育について読んだり聞いたりしたものの中で唯一教育的なものだ。そのうち論文を送るから読んでみたまえ。しかし、彼女の“奇妙さ”はどうやらタルボット嬢の言うことが正しいようだ。彼女は教職を離れてから靈魂再来の降靈術のようなものに取りつかれたらしい。いわく、ポップコーンと泉水が最も神聖な食物だと。彼女はいかれちゃっているのか、それとももう一度はけ口を見つければ治るのか、その辺はよくわからない。彼女は私に何も話さないが、『魂』という小冊子にいろいろ書いてあるのを読んだ。彼女の教育論文を読んだ時には、彼女に学校を始めてもらって、そうすればフレッド、エヴリン、モリスの問題は解決するなどと夢を膨らませていたので、この小冊子には愕然がくぜんとした⁹²⁾。

エイバー夫人がポピュラー・サイエンス・マンズリーに書いた教育論文というのは、同誌1892年1月号と2月号に掲載されてたその名も「教育における実験」という論文である⁹³⁾。この論文の内容については後に紹介するが、とにかくデューイはエイバー夫人のこの論文を読んで、自分が「以前キャンプ嬢に期待した考え」がそこにはっきりと示されているのを見て、彼女こそ実験学校を任せるのにふさわしい人物だと考えたのである。

ところで、ここに出てくるキャンプ嬢というのは、1894年にミシガン大学で理学士（B.S.）を取得し、後にデューイの実験学校で理科担当の教師となり、1936年には姉のアンナ・キャンプ・エドワーズ（Anna Camp Edwards）と共著で『デューイ・スクール』を出版することになるキャサリン・キャンプ・メイヒュー（Katherine Camp Mayhew）のことである。ということは、デューイは一番最初、このキャサリン・キャンプに実験学校の教師をやってもらおうと考えたが、彼が思い描いているような教育のやり方について彼女にはまだ十分な理解が期待できそうもないと

見て、別の人物を探しているときに、エイバー夫人が候補にあがったということであろう。

その一方で、デューイはエイバー夫人が心靈術にとりつかれていることに不安を感じ、はたして彼女に実験学校を任せてよいものかどうか、かなり迷っている。デューイが11月22日付の手紙で「エイバー夫人について私の決心がつけばの話だが、小学校段階の発足は彼女に委ねたいと思う」と言っていたその「決心」が意味するのはそういうことだったのである。この点について、デューイはアリスに次のように書いている。

しかし、常軌を逸した傾向がどの程度のものか私は知らない。ポピュラー・サイエンス・マンスリーのコピーはまだ来ていないが、彼女の論文を読めば私がエイバー夫人を推す理由が君にもきっとわかると思う。私がこれまで耳にしたうちで唯一の納得できる教育論だ。とてもシンプルでストレートで、際限なく広げることができる。…… エイバー夫人の問題は急がなければならない。君の判断がぜひとも欲しい。彼女は今日の午前中私にこう言った。狭い世間で主婦業をしていてもつまらなかったの、なにかに捌け口を求めてオカルト業を始めた。彼女は見かけは目立たないおとなしい女性で、教師をしていたときと同様の実直さがある。私が見るところでは、彼女は物事をはっきり視覚化してとらえる力があり、あらゆる事柄を客観的に投射してリアルにつかむまさに千里眼をもっているの、樹を見て森を見失うということがない。少なくとも私には、彼女が本の中で言っている狂気とそれ以外のところで示す彼女の良識とがどうしても一致しない。無理に一致させるのも危険だ。彼女に学校をやってもらうなら、私が欧州旅行に出かける前に、急いで彼女に話をしてみるべきだろうと思っている⁹⁴⁾。

ここに述べられているように、デューイはエイバー夫人の「狂気」は一時的なものと見て、彼女に実験学校を任せる気持ちに傾斜していることがわかる。ここでもデューイは、フランクリン・フォードや鉄道ストライキで出会った労働組合のオルガナイザーに引かれた時と同様に、どこことなく常軌を逸したところのある人物に魅力を見出している。

しかし、結局エイバー夫人は実験学校をやらないことになった。その間のいきさつはよくわからない。デューイは1894年12月14日にニューヨークから欧州旅行に出かけ、翌年3月にイタリアのミラノで第三子のモリスをジフテリアで亡くし、6月に失意のうちに帰国することになったが、まだフランスに滞在中の5月16日付の手紙で、彼はハーパー学長にエイバー夫人が実験学校をやらないことになったことを次のように伝えている。

2カ月ほど前エイバー夫人から手紙が来て、学校をやることはできないと言ってきました。たぶん、それでよかったと思います。私はすぐにでも帰国して他の人を探そうと考えましたが、今は6月始めの船で帰国しても遅くはないだろうと思っています。しかし、その時の状況がどうなっているかわかりません。願わくば、実習校(a practice school)に関するわれわれの考えを実行に移せる状況になっていればよいと思います⁹⁵⁾。

おそらくエイバー夫人は、デューイが欧州旅行に出かける前の11月末か12月始めに実験学校の仕事についてデューイから依頼を受け、思案のうえ、3月始め頃に断りの返事をしたのだと思われる。彼女がなぜ断ることにしたのか、その理由はわからない。

しかし、デューイはエイバー夫人の教育論にかなり引き付けられていたわけで、特にポピュラー・サイエンス・マンスリーの彼女の論文については「今までに私が教育について読んだり聞いたりしたものの中で唯一教育的なものだ」とか「これまで耳にしたうちで唯一の納得できる教育論だ」と絶賛していた。そこで、このエイバー夫人の論文の内容をやや詳しく見てみることにしたい。

ボストンにおける教育実験

エイバー夫人の論文は、ポピュラー・サイエンス・マンスリーの1892年1月号に第1部が、続いて2月号に第2部が掲載されている。第1部では1881年10月から3年間、エイバー夫人自身がボストンのポーリン・アガシ・ショウ夫人の学校の初等部でおこなった教育実験の様子が詳細に報告されている。第2部では、シカゴ近郊のエングルウッド（Englewood）地区の公立小学校の教師たちが取り組んだ同種の教育実験を簡単に紹介し、第1部と合わせて、一連の教育実験の意義を総括している⁹⁶⁾。

エイバー夫人は論文の中で、自らの教育実験の目的を次のように説明している。

実験の目的は、子どもに自然科学、数学、文学、歴史などすべての学問の基礎を教えると同時に、通常の初等教育がおこなっている読み書き計算の習得もあわせておこなうことができるかどうかを試すことであった⁹⁷⁾。

これだけではやや漠然としているが、別の箇所にある次のような説明を見れば彼女の実験の目的はより明瞭となる。

ほとんどの公立小学校は一日二部制〔午前と午後〕で年間10カ月だが、実験では一日一部制〔午前のみ〕で8カ月にした。公立小学校では読み方だけで週に5時間以上も費やしている。実験では科学の授業に週5時間以下しかあてず、しかも読み方はそれに付随しておこなった。書き方や計算など他の科目でもほとんど同じくらい大幅な時間の節約をおこなった。それでも、かなり高度な知識（superior knowledge）が子どもたちに教えられたうえに、通常の公立小学校で教えられているすべての科目〔読み書き計算〕も全般的によく習得された。このことは、子どもたちに3Rsの習得と同時に科学、歴史、文学も教えることは無理だという世間一般の常識が間違っていることを実証している。実験は子どもを本物の学習の世界（the world of real learning）に導き、それによって子どもの知力を鍛えることに主眼があった。だから、実験の正否はそうした目的に照らして判断されるべきである⁹⁸⁾。

エイバー夫人の教育実験の目的は、端的には、小学校教育の教育内容の高度化である。通常の公立小学校では、授業の大半は読み書き計算のスキルの獲得に費やされ、科学、文学、歴史といったいわゆる内容教科の学習はほとんどおこなわれていないか、おこなわれたとしても内容的にきわめて貧弱が多い。彼女がここで、子どもを「本物の学習の世界」（the world of real learning）に導き「子どもの知力を鍛える」といっているところがポイントであろう。読み書き計算のスキルの習得は本来、子どもを「本物の学習の世界」に導くための手段であるにもかかわらず、小学校で

は大半の時間がこのスキルの習得にあてられ、科学、文学、歴史などの本来の学習はあともわしにされている。その結果、膨大な時間の浪費が生じているというわけである。

そこでエイバー夫人は、小学校教育を読み書き計算のスキルの習得から始めるのではなく、いきなり自然学習 (nature study) から出発して、順次、文学、歴史などの内容教科の学習に導くとともに、それらの学習に合わせて付随的に読み書き計算を教えていくというやり方を試みるのである。これによって彼女は、幼い子どもでもかなり高度な知識の習得が可能であることを示すとともに、読み書き計算のスキルについても通常の公立学校よりはるかに短時間で確実に身につけさせることができることを実証してみせたのである。そして彼女は、ボストンでの3年間の教育実験を総括して、「理想の実現までには至らなかったが、幼い子どもたちを真の学習 (real learning) に導く可能性と価値とを実証するという点で実験は成功したと言える」と述べている⁹⁹⁾。

以上のようなエイバー夫人の教育実験の目的は、後にデューイがシカゴ大学実験学校の活動報告の中で述べていることと符合している。デューイは次のように述べている。

最近の統計資料をいくつか見てみると、学校に入学してからの最初の3年間の75%から80%は、学習の内容ではなく形式に、すなわち読み・書き・計算といったシンボルの習得に費やされている。こうしたものにはあまり身になる栄養はない。その目的は重要であり、また必要でもあるが、後年まで引き延ばされている積極的な教育内容、すなわち歴史と科学の真理、あるいは現実世界と美に対する洞察力の増大、こうしたものによって示される子どもの知的小および道徳的な経験の拡大には、シンボル形式の習得は少しも寄与しないのである。だから、われわれの実験の一つの目的は、子どもに周囲の世界についての理解を与え、自然界の諸力について、社会の歴史的発展について、多様な芸術形式で自分自身を表現する能力について、真に学ぶ価値のある教育内容を幼い子どもにどの程度与えることができるのかを発見することである。厳密に教育的な側面から言えば、これが当校の主たる問題であった。われわれはまさにこの方面において、教育全般に対する主要な貢献をなしたいと望んでいる。そのために、積極的な内容と固有の価値をもち、しかも生徒の側に探究と構成の態度を求めるような教科が、当校の実践の核にすえられる¹⁰⁰⁾。

これを見れば、デューイもまた初等教育の教育内容の水準引き上げを教育実験の目的に掲げていたことがわかる。一般に、デューイの実験学校といえ、子どもたちを詰め込み教育の重荷から解放して、自由奔放な活動の中で経験から学ぶ教育がおこなわれたというイメージが強い。しかし、彼の教育実験のねらいは当初から「真に学ぶ価値のある教育内容を幼い子どもにどの程度教えることができるのかを発見すること」にあったのである。それは初等教育から安易に知識教授をなくしたり知識教授を軽視したりすることではなくて、むしろ初等教育の段階からしっかりと知識教授をおこなうことの可能性を追求することであった。

その背景には、上の引用にあるように、小学校の最初の3年間の大半の時間が中味のない形式的なスキルの習得にあてられているという現実があった。子どもたちは学校でくる日もくる日も読み書き計算の機械的な反復練習をさせられるわけで、彼らの知的好奇心は少しも活用されないままに消耗させられている。デューイにとって、これは教育上の資源の浪費にほかならなかった。学校で

子どもたちの知的好奇心を満たすような適切な学習素材が用意されれば、彼らは大人の予想をはるかに越えた高度な知識内容を学びとることができる。そして、読み書き計算のスキルはそのような中味のある学習にともなう不可欠な用具として学ばれるとき、無味乾燥なドリルよりもはるかに短時間で確実に習得させることができる。

こうしてデューイは、初等教育の効率化（時間の節約）と教育内容の高度化を図る新しい初等教育方法の開発をめざして実験学校を開設するのである。しかも、初等教育の効率化（時間の節約）と教育内容の高度化は、まさにこの時代のアメリカにおける教育改革論議の中心的な議題にもなっていたのである。

デューイがエイバー夫人の論文に魅せられた最大の理由は、初等教育の効率化（時間の節約）と教育内容の高度化を図るための具体的な授業実践の展開がそこに示されていたからであろう。

註

- 1) *The Early Works of John Dewey, 1882-1898, five volumes; The Middle Works of John Dewey, 1899-1924, fifteen volumes; The Later Works of John Dewey, 1925-1953* (Carbondale, Illinois : Southern Illinois University Press)
- 2) George Dykhuizen, *The Life and Mind of John Dewey* (Carbondale, Illinois : Southern Illinois University Press, 1973)
- 3) Neil Coughlan, *Young John Dewey* (Chicago : The University of Chicago Press, 1975)
- 4) Robert B. Westbrook, *John Dewey and American Democracy* (Ithaca, New York: Cornell University Press, 1991); Steven C. Rockefeller, *John Dewey: Religious Faith and Democratic Humanism* (New York: Columbia University Press, 1991); Alan Ryan, *John Dewey and High Tide of American Liberalism* (New York: W. W. Norton & Company, 1995).
- 5) 小柳正司「デューイ・スクールの真実―シカゴ大学実験学校はどのような学校だったのか―」『鹿児島大学教育学部研究紀要―教育科学編―』第50巻, 1999年3月, 185-209頁。同「シカゴ大学実験学校の創設の背景にあったデューイの教育学構想―師範教育から教育科学の確立へ―」『鹿児島大学教育学部研究紀要―教育科学編―』第50巻, 1999年3月, 211-231頁。同「シカゴ大学実験学校の実践記録:1896-1899年」『鹿児島大学教育学部研究紀要―教育科学編―』第51巻, 2000年3月, 115-215頁。
- 6) Robert L. McCaul, "Dewey's Chicago," *The School Review*, Summer 1959, pp. 258-259; Dykhuizenn, *op. cit.*, pp. 74-77, 参照。
- 7) John Dewey to William Rainey Harper, February 15, 1894.
- 8) John Dewey to William Rainey Harper, March 5, 1894.
- 9) Thomas W. Goodspeed to University of Chicago Board of Trustees Executive Committee, March 10, 1894.
- 10) John Dewey to James H. Tufts, March 11, 1894.
- 11) 実際には、後にアメリカの機能主義心理学の大御所となるジェイムズ・ローランド・エンジェル (James Rowland Angell) が採用された。
- 12) John Dewey to James H. Tufts, March 26, 1894.
- 13) Ibid.
- 14) *The Annual Resister, The University of Chicago, 1895-1896* (Chicago: The University of Chicago Press, 1896), pp. 49-51.
- 15) John Dewey to William Rainey Harper, March 27, 1894.
- 16) John Dewey to William Rainey Harper, April 10, 1894.
- 17) Alice Chipman Dewey to John Dewey, May 10, 1894; Alice Chipman Dewey to John Dewey, May

- 19, 1984.
- 18) John Dewey to Alice Chipman Dewey, May 10?, 1894.
- 19) Willinda Savage, "The Evolution of John Dewey's Philosophy of Experimentalism as Developed at the University of Michigan," unpublished Ed.D dissertation, The University of Michigan, 1950, pp.20-21.
- 20) John Dewey to Alice Chipman Dewey, May 13, 1894; John Dewey to Alice Chipman Dewey, May 14, 1894; John Dewey to Alice Chipman Dewey, May 15?, 1894; John Dewey to Alice Chipman Dewey, May 24, 1894; John Dewey to Alice Chipman Dewey, May 29, 1894; John Dewey to Alice Chipman Dewey, July 7-15?, 1894; Alice Chipman Dewey to John Dewey, June 15, 1894; John Dewey to Alice Chipman Dewey, June 25, 1894.
- 21) John Dewey to Alice Chipman Dewey, May 15?, 1894; John Dewey to Alice Chipman Dewey, May 29, 1894.
- 22) Savage, *op. cit.*, pp.21, 171-172; Dykhuizen, *op. cit.*, pp.68-69.
- 23) John Dewey to Alice Chipman Dewey, May 14, 1894.
- 24) John Dewey to Alice Chipman Dewey, May 17, 1894.
- 25) John Dewey to Alice Chipman Dewey, May 24, 1894; John Dewey to William Rainey Harper, June 7, 1894.
- 26) Alice Chipman Dewey to John Dewey, May 30, 1894.
- 27) John Dewey to Alice Chipman Dewey, June 1, 2, 3, 1894.
- 28) Ibid.
- 29) John Dewey to Alice Chipman Dewey, June 13, 1894.
- 30) John Dewey to Alice Chipman Dewey, June 25, 1894.
- 31) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, June 30, July 2, 1894. "Sat. eve, June 30" の日付のはいった手紙でデューイは「明日の朝のこの時間にはシカゴにいるだろう」と書いている。
- 32) Ibid.
- 33) John Dewey to Alice Chipman Dewey, July 2, 1894.
- 34) Dykhuizen, *op. cit.*, pp. 71-72; Savage, *op. cit.*, pp. 140-150; Coughlan, *op. cit.*, pp. 93-106, 参照。
- 35) John Dewey to Alice Chipman Dewey, July 2, 1894.
- 36) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, July 4, 5, 1894.
- 37) Ibid.
- 38) W.P. メツガー, 新川健三郎・岩野一郎訳『学問の自由の歴史Ⅱ:ユニバーシティの時代』東京大学出版 1980年, 581-587頁。
- 39) John Dewey to Alice Chipman Dewey, September 25, 1894. デューイの兄デイヴィスはマサチューセッツ工科大学の経済学教授をしており, 9月21日にデューイのところに来てしばらく滞在している。その間, デイヴィスはベームスと会い, 彼からいろいろと話を聞いたらしい。
- 40) John Dewey to Alice Chipman Dewey, July 9, 1894.
- 41) John Dewey to Alice Chipman Dewey, July 14, 16, 1894.
- 42) John Dewey to Alice Chipman Dewey, July 20, 21, 1894.
- 43) John Dewey to Alice Chipman Dewey, July 28, 29, 1894.
- 44) John Dewey to Alice Chipman Dewey, August 23, 1894.
- 45) John Dewey to Alice Chipman Dewey, August 31, September 2, 1894; John Dewey to Alice Chipman Dewey, September 13, 1894.
- 46) John Dewey to Alice Chipman Dewey, July 9, 1894.
- 47) John Dewey to Alice Chipman Dewey, July 16, 1894. デューイの酒好きとヘビースモーカーぶりは知人の間でよく知られていた。
- 48) John Dewey to Alice Chipman Dewey, July 9, 1894.
- 49) John Dewey to Alice Chipman Dewey, August 5, 1894.
- 50) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, July 4, 5, 1894; John Dewey to Alice

Chipman Dewey & children, July 12, 1894.

- 51) John Dewey to Alice Chipman Dewey, September 25, 1894.
- 52) John Dewey to Alice Chipman Dewey, October 9, 1894.
- 53) John Dewey to Alice Chipman Dewey, October 2, 1894.
- 54) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, August 5, 1894.
- 55) John Dewey to Alice Chipman, Frederick A., & Evelyn Dewey, August 23, 1894.
- 56) John Dewey to Alice Chipman, Frederick A., & Evelyn Dewey, August 28, 1894.
- 57) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, September 13, 1894.
- 58) John Dewey to Alice Chipman Dewey, September 25, 1894.
- 59) John Dewey to Alice Chipman Dewey, October 7, 1894.
- 60) John Dewey to Alice Chipman Dewey, October 10, 1894.
- 61) John Dewey to Alice Chipman Dewey, May 22, 1894; John Dewey to Alice Chipman, Frederick A., & Evelyn Dewey, July 12, 1894; John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, August 25, 26, 1894; John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, September 13, 1894; John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, October 19, 21, 1894.
- 62) John Dewey to Alice Chipman, Frederick A., & Evelyn Dewey, August 18, 19, 1894.
- 63) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, October 18, 1894.
- 64) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, July 28, 29, 1894.
- 65) John Dewey to Alice Chipman Dewey, August 2, 1894.
- 66) John Dewey to Alice Chipman Dewey, August 2, 1894.
- 67) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, October 18, 1894.
- 68) John Dewey to Alice Chipman Dewey, September 23, 1894; John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, September 30, 1894.
- 69) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, October 18, 1894.
- 70) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, November 1, 1894.
- 71) Ibid.
- 72) John Dewey to William Torrey Harris, December 4, 1894.
- 73) Ibid.
- 74) *Lectures in the Philosophy of Education: 1899*, by John Dewey, ed. by Reginald D. Archambault (New York: Random House, 1966)
- 75) John Dewey, *Democracy and Education* (1916), *Middle Works of John Dewey*, vol. 9.
- 76) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, November 20, 1894.
- 77) Ibid.
- 78) John Dewey to Alice Chipman Dewey, November 1, 1894.
- 79) Ibid.
- 80) Ibid.
- 81) Kathleen Cruikshank, "In Dewey's Shadow: Julia Bulkley and the University of Chicago Department of Pedagogy, 1895-1900," *History of Education Quarterly*, Vol. 38, No. 4, Winter 1998, pp. 376-379.
- 82) Ibid., pp.379-380.
- 83) John & Morris Dewey to Frederick A., Evelyn, & Alice Chipman Dewey, November 22, 1894.
- 84) Ibid.
- 85)
- 86) John & Morris Dewey to Frederick A., Evelyn, & Alice Chipman Dewey, November 22, 1894. 当時、シカゴ大学周辺のハイド・パーク地区は、シカゴの高級住宅地の一つであった。
- 87) John & Morris Dewey to Alice Chipman Dewey, December 8 or 9?, 1894. Ibid.
- 88) John Dewey to Alice Chipman Dewey, November 15, 1894.
- 89) "Identification"
- 90) John Dewey to Alice Chipman Dewey, November 15, 1894.

- 91) John Dewey to Alice Chipman Dewey, November 15, 1894. タルボット嬢 (Marion Taibot) はシカゴ大学の衛生学の助教授 (assistant professor) で女子学生部長 (dean of women) である。
- 92) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, November 18, 1894.
- 93) Mary Alling Aber, "An Experiment in Education, " *Popular Science Monthly*, January and February 1892.
- 94) John & Morris Dewey to Frederick A., Evelyn, & Alice Chipman Dewey, November 22, 1894.
- 95) John Dewey to William Rainey Harper, May 16 1895.
- 96) エングルウッドはシカゴ大学のキャンパスから西に少し行ったところで、ここにパーカーのクック郡師範学校もあった。
- 97) M. A. Aber, op. cit., p. 377.
- 98) Ibid., p. 388.
- 99) Ibid., p. 392.
- 100) Mayhew & Edwards, op. cit., p. 25. なお、引用訳出にあたっては、次も一部参照した。Dewey, "Three Years of the University Elementary School," *Middle Works of John Dewey*, vol.1, pp.59-60.